GLOBE Voice

The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies 2010 Number 2

東京外国語大学

東京外国語大学
Tokyo University of Foreign Studies

〈編集後記〉遅まきながら訪れた秋の、ふと心なごむ陽の光につつまれたキャンパスに、外語大のあたらしい顔がのぞく。広報誌第2号は、10年前に、ここ府中キャンパスに移転してからも、西ヶ原時代と変わらず、外語大らしさをつたえる外語祭の季節に、読者へと届けられる。伝統のなかで、けれど少しずつ曲がり角をたどりながら進むうちに、歳月を重ね、気づいたら思いの外おおきなカーヴを切っていることもある。次号は桜のころに。（編集子）V

GLOBE Voice
グローブヴォイス
2010 Number 2
The Magazine of Tokyo University of Foreign Studies

2010年10月発行
発行＝東京外国語大学
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
総務企画課広報係

編集＝広報マネジメント室
編集協力＝日経BPコンサルティング
印刷＝大日本印刷

アートディレクション＝犬飼健二
表紙撮影＝市橋織江
デザイン＝村山ハルカ（犬飼デザインサイト）

©東京外国語大学2010
本誌記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。

特集

時間と空間の交差点

外語大に新たなシンボルが加わった。「アゴラ・グローバル（地球の広場）」と名づけられた異文化交流施設は、21世紀に相応しい開放感あふれる空間を演出している。

写真・岩崎美里

写真・市橋織江

GLOBE Voice
2010 Number 2

「GLOBE Voice」。「地球」と「声（=人）」という2つの言葉をあわせた造語です。2号目となる今回の巻頭グラビア特集は、今春完成した「アゴラ・グローバル」です。アゴラはギリシャ語で広場。「地球の広場」を意味します。言葉を入り口に社会とつながり、世界へと広がっていく。そのためには、さまざまな国の文化や歴史といった、背景を知ることが欠かせません。「地球をつなぐ声」を発することができる人材を育てること。それが、東京外国語大学の使命です。

Contents

時間と空間の交差点 ──3

History of TUFS ──7

学長対談 ──8
TBSテレビアナウンサー　久保田智子

graduated active person in society ──14
沖縄美ら海水族館 館長　内田詮三
厦門大学日本語言文学系院 副教授　黄少光

person doing research ──16
黒木英充／沼野恭子／荒川洋平

コラム「聴」──22
荒川慎太郎／岡野賢二／博多かおる

歴史を刻む在学生 ──26

News ──28

アライバルコートに面してつくられた空間には、屋外の交流スペースとして、ベンチが配置されている。

映像や音響機能に加え、同時通訳機能も備える「プロメテウス・ホール」。最大501人収容できる。

「世界に開かれた」キャンパスのシンボルとして

異文化交流施設「アゴラ・グローバル」が2010年4月に完成、オープンした。府中キャンパス正面から入ってすぐ左手、アライバルコートに面して立つ地上3階建ての同施設は、白亜の壁に大きさの異なる長方形の窓が多数取りつけられ、個性的な建造物が多いキャンパスの中でも、ひと際目を引く存在となっている。

アゴラ・グローバルの名称は学内外の48の公募の中から選ばれた。「アゴラ」はギリシャ語で「広場」の意で、合わせて「地球の広場」という意味が込められている。「対話（ダイアローグ）を核として世界に開かれたキャンパス」という施設整備の基本理念を体現する建物として、外語大の新たなシンボルとなっている。

中央広場を囲む円形の回廊を通じて、講義棟、図書館、食堂などにつながる。

外語大は数ある日本の大学の中でも、日本人と海外からの留学生が顔を合わせる機会が最も多い大学と言える。そこでお互いが意見交換などを通じて親しくなるだけでなく、日本人、留学生それぞれが情報を発信していってほしい、という願いがこの施設には込められている。

そうした情報発信の中心となるのが、501人収容可能な「プロメテウス・ホール」だ。最新の音響と映像設備はもとより、3つの同時通訳ブースも備えている。座席の前には引き出し机も配されている。すでに大人数の授業で使われているほか、学生の自主的な集会から、大学主催のシンポジウム、国際的な会議まで幅広く利用されている。ホールの反響板はコンサート用の本格的なもので、グランドピアノも備えているため、コンサートや映画祭など各種イベントで地域に向けた情報発信もできる。

ホール名に冠された「プロメテウス」はギリシャ神話の英雄で、「先見の明を持つ者」とされる知の象徴（31ページ参照）。外語大の大学歌にも謳われ、大学のブランドイメージの一つにもなっている。ホール内は、プロメテウスが人類に

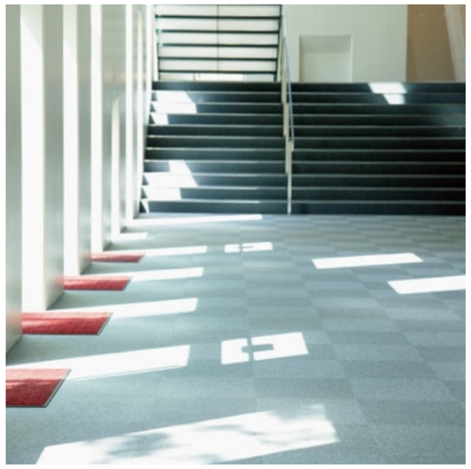
カフェを設置した屋内の交流スペース。学生、教職員はもとより地域の人も利用できる。

散りばめられた小窓を通して人の動きや風の流れを感じることができる。

伝えたとされる火を想起させる「赤色」と、ゼウスの怒りを買って責め苦を負わされたとされるコーカサスの岩をイメージした「茶色」を基調にデザインされた。

アゴラ・グローバルには、このプロメテウス・ホール以外にも、学生・教職員などの交流の場となるグローバル・コミュニケーション・プラザやカフェ・カスタリアが併設され、2、3階部分はプロジェクト・スペースとしてグローバル・インフォメーション・プラザ、国際日本研究センター、東京外国語大学出版会、アラムナイラウンジなどが入っている。

施設前には多くの人たちを迎え入れるため、2つの広場を設け、前庭としての広場と、待ち合わせや交流スペースに活用できる広場をそれぞれ配置している。



1階にあるエントランスホール。
床や壁を移動する光が時の移ろいを演出する。

2階の「グローバル・インフォメーション・プラザ」につながる明るい廊下。

「対話と交流」で未来を開く知的空間に

特徴的なのが、冒頭でも紹介した小窓を散りばめた屏風のような外観だ。大きさや配置を変えた長方形の小窓は、外語大に通うさまざまな国の留学生の個性と調和を象徴的に表現している。また、大きなガラス窓ではなく、身体感覚に近い大きさに細分化された小窓を多く配置することで、利用者に自由で自主的な活動や意識を促す効果をねらっている。

必要な明るさや景色を確保するため、小窓の上下の壁には斜めの切り欠きを施し、暗くなりがちなホール側の壁上部にはトップライトを設置。光を効果的に活用できるよう白を基本とした内装に留意している。

小窓を多く散りばめた独創的な外観は、差し込む光の帯を優しく迎える。時間とともに床や壁を移動する小窓の光は、利用者に時の移ろいを感じさせる。夜は内部の照明がアライバルコートを照らす。周囲の木々とも調和し、内部と外部を緩やかにつないでおり、「対話と交流」で未来を開く知的空間に相応しいデザインとなっている。▼

緑を内部に取り込む小窓。1枚の絵の雰囲気が漂う。

時代とともに
History of TUFS

大学要覧が映す歴史

1950年代後半、高度経済成長期の日本において、白黒テレビ、洗濯機、冷蔵庫は「三種の神器」と呼ばれていた。家電製品は、豊かさの象徴であると同時に、その時代を映し出す鏡でもあった。冷蔵庫を例にとっても、技術革新で性能は格段に進化しながらも、形状は大型化もしくは小型化の一辺倒ではなく、原点回帰に似た揺り戻しなども経ながらさまざまに形を変え、時代背景や社会的な要請を如実に現している。

では、大学の変遷を映し出す鏡とは？　その一つが大学要覧だろう。外語大の場合も、昔のものは表紙やロゴなど圧倒的な国立大学志向だったに写真や鮮やかなデザインな「沿革」「組織」「学則」に加え、大の特色を鮮明に要も盛り込んでいる。た要素はデータ集

に歴史を感じさせ味わい深い。1954年当時、現在のようどはなく、目次には「学年暦」学校教育法などの関係法規も

そして現在――。大学概要の名で、ふたたび冊子スタイルから、より軽量のパンフレットに一新。並ぶ。1965年以降になると、これまでの冊子スタイルに定着。教育・研究目標などにおける外語打ち出し、組織や施設の概かつての要覧に記載してい として集約された。

学長 亀山郁夫 対談

「等身大の自分を大きくしたい」

外語大は、これまで多くの優秀な人材を各分野に送り込んできた。人気業界で、難関といわれるテレビ局もその一つ。今回の学長対談は、TBSテレビを代表するアナウンサー、久保田智子さんをゲストに迎えた。この9月まで、朝の情報番組「みのもんたの朝ズバッ！」のキャスターとして出勤前のサラリーマンたちに一日の活力を与えていた久保田さん。「自分ならではの言葉は自らの中で養われる感性によって紡がれるもの」と表現する。西ヶ原のキャンパスで過ごした大学時代が、アナウンサーを目指すきっかけになった。個性を大切にする外語大の雰囲気に懐かしさを感じつつ、母校の発展に期待を寄せる。

ゲスト

久保田智子さん

TBSテレビアナウンサー

くぼた ともこ
1977年生まれ。広島県出身。2000年東京外国語大学欧米第一課程英語専攻卒業。同年TBSに入社。バラエティーからニュース番組まで幅広く担当している。

文・小玉進午　写真・高仲建次

「いろいろな人の声を聴き、本質を拾える代弁者に」

――久保田

亀山郁夫学長（以下、学長） 久保田さんは2000年春に英語専攻を卒業されましたが、この新しい府中のキャンパスは初めてですか。

久保田智子（以下、久保田） 実は一度、外語祭を観にきています。TBSには外語大の卒業生が多く、アナウンス部にも1989年入社でロシア語学科出身の小林豊と、私の一学年下で同じ英語専攻の竹内香苗がいます。その3人でお邪魔しました。

学長 それはいつごろですか。

久保田 5年ほど前です。久しぶりに外語祭を楽しみました。昔の外語祭とは違う雰囲気になりましたね。私は西ヶ原のころの外語祭も大好きで、印象に残っています。校舎自体が、迷路のようでした。建て増しを重ねた結果なのですが、「こんなところにこんなものがある！」という発見が刺激的でした。その点、府中キャンパスはすごくきれいです。

学長 僕もよく覚えています。講義棟は四角くて平凡な形をしていたのですが、内部は〝巣窟〟とでもいったような感じで、地下室みたいな空間もありましたからね。そういったものはなくなりました。

外語大での人との出会い、そして米原さんのこと

学長 ところで外語大を受験校としてイメージしたのはいつごろでしたか。

久保田 高校進学のときに、親から「県立に合格したら英語の勉強のためにホームステイしていい」と言われたのがそもそものきっかけだったと思います。無事に県立高校に合格し、約束通りにホームステイをさせてもらいました。その体験から英語の魅力に取り憑かれ、大学は英語の勉強ができるところにしようと外語大を選びました。単純な志望動機でしたが、入学して本当によかったと思っています。

外語大には、「なんじゃこりゃっ！」という刺激が沢山ありました。広島から東京に出てきた私は、都会に対するコンプレックスがありました。ファッションでも、当時の雑誌に載っていた「アンサンブルのカーディガンにタイトスカート」と勝手にイメージしていたのですが、外語大にそんな人はほとんどいません（笑）。

逆に私の周りには個性的な人が多く、例えば、映画を観に、千石の三百人劇場（財団法人現代演劇協会が運営していた劇場。現在は閉館）に行こうと誘ってくれる人がいたりして楽しかったです。その劇場で、私は初めて小津安二郎監督の映画を観て、すっかりファンになりました。ほかにもボリス・バルネット監督などロシアの映画もよく観ましたし、音楽イベントでDJ（ディスク・ジョッキー）をしたり、絵を描いたりと、刺激的な学生生活を送ることができました。

学長 地球を覆うような感じで26の専攻語があり、各々がそれぞれの言語を通して知る文化があるわけです。久保田さんの場合は、そういう情報が友達付き合いの中から自然に集まっていたのですね。

久保田 貴重な出会いでした。それがなかったら、私はアナウンサーになっていなかったかもしれません。今でも当時の友達とは仲良しです。

学長 アナウンサーになるきっかけはどんなものでしたか。

久保田 大学3年のときに1年間カリフォルニア大学に留学しました。帰国後すぐに採用試験が始まって、なんとなく受けたら、とんとん拍子に採用が決まった。自分でもびっくりです。そのため、入ってから苦労しました。鼻濁音や無声化という日本語を美しく発音するための技術があるのも、新人研修で初めて知ったくらい。周囲はアナウンススクールに通ったりしていて知っていたわけです。当然のことながら私は研修で相当しごかれました。一時は、話すのが怖くなった時期もあったくらいです。手のひらから顔、全身にじんま疹が出るほどでした。

学長 極度のストレスですね。

久保田 周りからいろいろ言われると硬化してしまう性格なんです。そのころに出会ったのが外語大出身の大先輩、米原真理さんでした。朝の番組にコメンテーターとして出演されていたのです。最高に素敵な方です。番組でこんなことを言ってもいいのかしらと心配するほど、大胆なところもありました。

学長 接点があったんですね。米原さんは我らが誇りとする人物です。

久保田 誇りですね。しばらくお付き合いする間にいろいろと注意を受けて、「米原さんが言っていることは確かにその通りだ。私はテレビ的なことばかり意識しすぎていた」と自分自身を見つめ直しました。吹っ切れたのはそのころからです。今でもよく覚えているのですが、番組の占いコーナーで、私が「水瓶座の人はアンラッキーな一日、トマトを食べてがんばりましょう」というような原稿を読むわけです。すると米原さんから「あなたね、それではなんのアドバイスにもなってないでしょ」と指摘されたのです。

学長 ほう。

久保田 「『アンラッキーな日。トマトを食べないと最悪でしょう』とかもっと変えて言いなさい」と注意されました。

学長 私は彼女と同時代を生きてきましたから懐かしいですね。外語大が生み出していくべき人材、どういう人がモデルになりうるかを考えるとき、よく米原さんを思い浮かべます。

外国語を学ぶというのは、単純に語学を勉強するのではなく、やはり媒介者、つまり言語と言語、文化と文化をつなぐ媒介者として学ぶことなのです。そしてこの媒介者こそが最高の知性であるというのが私の信念です。翻訳は、ある意味では作家以上の知性がないとできない作業です。作家は確かにすばらしい知性と本能の固まりを持っているかもしれませんが、それを媒介する人間はその言葉をしっかり聞き届けて人に伝える重要な役割を担っています。米原さんはその意味で、最高の媒介者でした。しかもその後、主役、つまり作家にまでなりました。

学長 久保田さんは今、報道番組を担当されています。私の個人的な印象ですが、やはり外語大の難関の英語専攻というこ

とで、ある種の教養と知性の人が話しているイメージがあるかと思うのです。その上で今後、自分の中に積み上げていきたいイメージはありますか。

久保田　具体的なイメージはまだありません。自らジャンルわけをして垣根をつくりたくはないんです。ですが、米原さんがロシア語を使ってさまざまな事柄を通訳してきたように、私もいろんな人の声を聴いて、その人たちの代弁者となり、本質の部分を拾う作業を確実に積み重ねていきたいですね。

自然体でこその存在感 良いものに接する喜び

学長　２０１０年の1月から約9カ月、毎朝5時半から8時半までの番組をずっと担当されていらっしゃいました。そのがんじがらめの生活に耐えていく力はどこから出てくるのですか。

久保田　やはり良いものにできるだけ多く接することだと思っています。良い映画や音楽などに接して、思考を切り替える力をきちんと保つようにする。歌舞伎も好きなのですが、一度だけでなく、同じ演目でも繰り返し見続けないと正当な評価ができないと思います。眼を肥やす作業は、後で必ずほかの場所でも活かされますから。自ら意識してそうしないと、平日は毎日朝の仕事に追われ、土曜日は夕方の番組を務め、日曜日の夜になるともう翌日のことを考えるだけの状態に陥りやすいと思います。

学長　アナウンサーは学生にとって憧れの職業です。本当に針の穴のように狭い難関を突破して今のキャリアを築かれた久保田さんですが、自分が持っている力、あるいは才能など、何が自分の強さだと思いますか。

久保田　自分の力が最大限に発揮できるのは、「力が抜けているとき」だと思います。アナウンサー試験を受けたときもそうですが、落ちても構わないと思っていました。だからこそ採用試験でも自分の好きなことを並べて答えることができたのです。「ここで興味を示してもらったら、こう切り返そう」なんて、最初から考えて出るものではないと思います。

学長　それを「強さ」というのでしょうね。今の表情を拝見していても、眼がイキイキしているというか、解放されていて存在感があります。長い間、カメラの前に身をさらしてきたことによるのでしょうか。

久保田　テレビカメラはすごく怖いです。後で自分の映像を振り返ると、すごく気を遣って原稿を読んでいるときと解放されているときの違いが明確に出ます。自然に訴えたくて言葉が出てくる場合と、「これは殺人事件だからこういう顔で読まないといけない」と型にはまって読むのでは出てくるものが全く違います。それはほかのアナウンサーを見ていても感じます。現場で「なぜこの人は気を遣っているのだろう、なんでこの人は緊張しているのだろう」という感じを受けることがあるのですが、その違和感はカメラを通すとより際立つのです。

学長　採用試験のときにはいろいろ聞かれたと思いますが、どのようなことをお答えになったのですか。例えば、卒論のテーマについては？

久保田　卒論は留学時代に知ったグラミン銀行について書きました。バングラデシュでマイクロクレジットという貧困層へ無担保融資を提供したり携帯電話を貸したり、草の根の援助をして２００６年にノーベル平和賞を受賞した組織です。今でこそ有名になりましたが、当時の日本では指導教官も知らないくらいでした。当然、日本語の文献もほとんどなくて、英語の本をいろいろ読んでまとめました。

学長　人事の立場から見ると、そのテーマの選び方は非常に面白いし、採用者の気持ちをそそりますね。一見した印象とその人がこだわる人生のコントラストの違い、ギャップが興味深い。

久保田　ギャップという意味では、アナウンサー試験には1分間の自己アピールがあります。ＯＢ・ＯＧ訪問でよく聞かれるのですが、私の場合は学生時代にしてきたことをたくさん並べました。世界10カ国を巡った話や、イギリスの法律事務所でアルバイトをしていた話です。とにかく相手が興味を持ちそうな要素をたくさん並べました。小津安二郎が大好きだ、という話もその時にしました。今でも覚えていますが、最後の役員面接で、社長が（入社後社長だと知る）「小津安二郎って言ってるけどね、そりゃ、おじいちゃんやおばあちゃんには受けるかもしれないけど、若者に受けるかね」と訝しげで内心焦りましたが、「実はタイタニックも大好きなんです！」と答えました。当時流行っていましたし、確か電車でカップルがそんな話をしていたなと（笑）。

学長　なるほど。最初からタイタニックと答えていたら、引っかからないし、話が発展しなかったかもしれませんからね。でも小津安二郎ファンというのは本当の自分なりの趣味なのですか。

久保田　ええ、『東京物語』『お早よう』『晩春』など、すごく好きです。

学長　ところで、学生時代の自分自身と比べて、言葉の発し方は変わりましたか。

久保田　話している内容は全然違います。経験を積んだ分、学生時代と比べると、より深い話もするようになりました。ですがスタンスはあまり変わっていないかもしれません。やはりこだわりというのが自分の中にあまりないのでしょう。番組でもスポーツでないと、報道でないとイヤだとか思ったことはありません。こだわりがない分、柔軟に吸収ができるのだと思います。

学長　それだけご自身に自信があるのですね。何にでも対応できるという、ある種の余裕が自分の中に内在しているのでしょう。

久保田　所詮、自分はこんなもんだと思っているのです。そういう余裕の持ち方ってあるのではないでしょうか。「これ以上にはならないから、等身大以上のことをしても仕方がない」と常に考えます。むしろ、その等身大が大きくなっていけばいいと思っています。

学長　等身大を大きくする。なるほど、いい言葉ですね。

守るべきもの 変わるべきもの

久保田　実は、私、外語大でボート部のマネージャーだったんです。

学長　それはすばらしい。

久保田　それも流されるまま（笑）。友達に誘われて戸田漕艇場に見学に行ったら、断れなくなりそのままマネージャーになってしまいました。合宿で、男の子たちがお風呂に一緒に入ったりしていて、不思議な世界でした。外語大にもこういう個性があるのだなと驚きました。

学長　ところで、外国語を学ぶ大学として、外語大は唯一の国立大学です。今後どういう道を進むべきか、私たちも日々模索を重ねています。初めに西ヶ原キャンパス時代の話が出ましたが、外語大のいわゆる〝尖った部分〟を含めて外語大出身者として、今後の外語大にどのようなイメージを期待されますか。

久保田　今の私はどうしても番組作りの目線で考えてしまいます。番組は何より見てもらわないといけない。そうするとよりわかりやすい形にするなど、内容が視聴者に媚びるものになりがちです。それについて筑紫哲也さんがおっしゃっていました。「番組というのは視聴率を取らないと終わってしまう。でもたくさんでなくていい。ある程度一定の存続するぎりぎりのラインは取っていて、その中で見てもらうためのもの、見せたいものをきちんと分けて出していけばいい」と。

大学にも守らないといけないものは絶対あります。外語大の場合、私は個性を受け入れる環境と感じています。一方で日本には大学が数多くあり、大学を出ても就職は厳しい現実がある。なんとなく入る新入生も多いでしょう。それって番組作りの問題と似ている気がします。外語大はすごくいい大学ですし、卒業生でよかったと思っています。ですので、その良さを守りつつ、経営的には苦境に陥ることなく、高い品質を維持し続けてほしい。番組作りでもその答えを探していきたいと思います。▼

「媒介者こそ最高の知性、それが私の信念です」――亀山

かめやま いくお
1949年生まれ。東京外国語大学長。ドストエフスキー関連の翻訳・研究や、ソ連・スターリン体制下の政治と芸術の関係をめぐる著書が多い。主なものには『ドストエフスキー 父殺しの文学』、翻訳『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』ほか。

graduated active person in society_01

世界一への飽くなき挑戦

内田詮三

沖縄美ら海水族館 館長

飽くなきチャレンジ精神で、進化し続ける沖縄美ら海水族館の館長を務める内田さんは、「年間500万人の観光立県」実現に貢献した立役者だ。沖縄の悲願達成が、同水族館開館の1年後だったことからも、その貢献度がわかる。

出身はインドネシア語科。両親が戦時中、インドネシアへの移住を口にしていた影響もあった。

「当時も人気はヨーロッパ系言語でした。元来ヘソ曲がりなのでしょう。アジアの言語で行こうと思ったのです」

内田さんが生まれた1935年当時、インドネシアはオランダ領だった。太平洋戦争でオランダが敗れて解放され、45年に独立宣言をした。卒業した61年ごろは、戦後の賠償問題などでインドネシア語の需要があり、普通の学生は就職には困らなかった。しかし、都会生活、そしてデスクワークには向いていないという自覚があった。

「そのころ、親が水族館業を始めました。イルカ好きの私は飼育希望でそこに就職。それが、この道に入ったきっかけです」

うちだ せんぞう

1961年東京外国語大学第七部第二類(現・インドネシア語専攻)卒業、同年静岡県伊東水族館入社、71年福島県照島ランド園長、81年国営沖縄記念公園水族館(2002年から現在の沖縄美ら海水族館)館長。農学博士(東京大学)。静岡県出身。

その後、福島の遊園地に移り、都合13年勤める。園内の水族館で飼育やショーなどあらゆる業務を経験した。園長にもなったが、経営は厳しくまともな給料ももらえなかったという。しかしその間に、東京大学の淡水イルカ調査隊の一員となり、35歳でバングラデシュに出かける。その後も世界30カ国以上を回り見聞を広げた。ここから水生動物の研究に取り組み、99年に「沖縄のサメ・エイ類の研究」で農学博士号を取得した。

美ら海水族館は75年に開催された沖縄国際海洋博覧会の出展水族館がその原型。02年の本土復帰30周年を記念し、最新鋭の施設にリニューアルして新水族館としてスタートした。50mのオリンピックプール3杯分の大水槽「黒潮の海」は、アクリルパネルの大きさでギネスブックに掲載された。そこで優雅に泳ぐ全長8m以上のジンベエザメや、体重2t以上あるマンタの姿は圧巻そのもの。

「次はもっと大きな水槽をつくり、ザトウクジラを飼いたい」

世界一への挑戦は続く。▼

graduated active person in society_02

日本の漢詩に魅かれて

黄少光

厦門大学日本語言文学系院 副教授

黄さんが勤める厦門(アモイ)大学は、中国の国家重点大学指定35校の一角を占める。外語大で学んだ経験を活かして教鞭を執る日々を送るが、その道のりは決して平たんではなかった。

進学率5%未満の時代で大学受験に失敗し銀行に就職したが、数字が苦手で仕事を続けるか悩んでいた。そのころ、書道の展示会で日本の書を見て衝撃を受ける。

その書家・手島右卿(1901〜1987)は58年のブリュッセル万国博で最高殊勲金星に輝いた「昭和の三筆」と呼ばれる存在。

「正直私には、〝敗筆〟にしか見えなかった。この書の良さは何なのか、実際に日本で勉強したいと26歳で留学を決めました」

留学先は書道に力を入れる大学を選んだ。だが、書を知るには、日本文化全体を学ぶ必要がある。

「『万葉集』の勉強はしばらくしたものの、『懐風藻』研究にも力を入れていた指導教官から『あなたは中国人なのだし日本の漢詩を勉強してみては?』と言われたのです」

今でこそ日本古典の最高傑作は『源氏物語』との評価が一般的だが、古代国家の形成以来、日本人も朝鮮人も漢文で普遍的思考なり感情なりを表現することは知識人にとって当然のことだった。奈良時代ならば『懐風藻』や『日本書紀』が公式の文学であり、紫式部などは偉大ではあるが、文学史の事実としては、当代の傍流に過ぎなかった。そこで、黄さんは日本の漢文学の盛時の一つである平安時代初期の漢詩を研究対象に選んだ。

「漢詩の詩律学を学ぶため外語大に移りました。博士論文は『奈良・平安朝日本漢詩の詩律的研究』。8年間の外大時代は、村尾誠一先生のゼミの仲間と激論したり、沓掛良彦先生(03年退官)の研究室でお酒を飲みながら深夜まで文学を語り合うなど忘れられない思い出がいっぱいです。今は中国人学生を相手に同じようなことを続けています」

漢詩の魅力を「和歌と同じく一瞬の感動を一瞬の中に凝縮させる力」と語る。今後は古今和歌集に挑みたいと意気込みを語った。▼

こう しょうこう

高校卒業後、中国人民銀行に就職。その後、日本への留学を決意し、26歳で来日。大東文化大学で学ぶ。大学院から東京外国語大学、2003年3月博士課程修了、博士(文学)。同年12月から現職。

person doing research

1

世界の中東研究の一翼を担う

Interview with Hidemitsu Kuroki

ベイルートの中東研究日本センターでの講演会。キプロスから研究者を招聘して分断国家の再統合の可能性について議論した。レバノンのキプロス大使も参加した。

黒木英充氏の研究対象は「歴史的シリア」地域の19世紀近代史である。これをムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒などの宗教・宗派間の関係に注目して考察してきた。国でいえば主にシリア、レバノンだが、地理的には、パレスチナ／イスラエル、ヨルダン、トルコ南東部までを含む。紛れもない〝中東の火薬庫地帯〟だ。

「大学1年のときに聴いた板垣雄三先生の講義で、中東に対する先入観がひっくり返りました。イスラムの根幹を成す〝神と人間の契約〟などの考えに引き込まれたのです。また、そのころはレバノン内戦中（1975～1990）で、その要因を歴史的にも究明したくて研究者の道に進みました」

だが内戦の影響でレバノンに入れず研究に苦心する。研究対象をひとまず隣国シリアに変え、当時流行だった都市研究に主眼を移した。古都アレッポはエルサレム―ダマスクスに連なる人類最古の農耕地域に位置しており、オスマン帝国時代の資料も豊富だった。その成果は19世紀アレッポの都市騒乱と社会変動を分析した修士論文で結実する。

「ただこの論文はあくまでも活字資料を元にしたものでした。まだ利用されていないアラビア語の手書き文書資料を見たかったのです」

そこで89年から2年間、日本学術振興会の研究員としてダマスクスに入り研究に没頭した。だが、91年1月、湾岸戦争が起こり、日本大使館の要請でシリアを一時出国することになる。しかしこの〝難民生活〟がその後の研究活動に大きな転機をもたらした。

イスラム世界のしたたかさと寛容さ

出国先のトルコにはオスマン帝国時代の都イスタンブルがあり、そこには無尽蔵の資料がある。オスマン帝国の支配下にあったアレッポでのさまざまな出来事は帝都でどのように記録されていたのか、新たな視点がそこにあった。

「19世紀の半ばまで人頭税という制度がありました。ムスリム以外のユダヤ教徒とキリスト教徒が払う税金なのですが、これさえ払えば信仰の自由と安全は保障されました。その台帳がイスタンブルにあったのです」

19世紀半ばのアレッポには、人頭税の課税対象となる成人男子は年間約5000人いた。4カ年分の記録をコピーし、2カ年分1万人以上の記録をデータベース化していった。結果は現代中東情勢にも大いに示唆を与えるものだった。

イギリス人医師が18世紀のアレッポ社会を活写した書物。水たばこ、キセルを吸う男性、コーヒーを飲む男性が描かれている。

「人口動態ですが、5年間で三分の一とかなり激しく入れ替わっていました。また別の法廷記録と合わせてみると、宗派によって就労職業の特徴があるけれども、ムスリムも含めて一緒に仕事をするのが普通だったこともわかりました。中流程度の生活レベルの人同士が日本円換算で何千万円規模の金の貸し借りをしている事例なども浮かび上がったのです」

宗教、宗派間の対立、隔離ではなく、生活の上でのしたたかさとイスラム文化に共通する商行為での徹底した〝信用貸し〟の実像が、150年前の資料に明確に残っていた。

日本の中東研究拠点、ベイルートに設立

レバノンを初めて訪れたのは内戦が終結して4年後の94年だった。長年の内戦で、かつての「中東のパリ」の姿はどこにもない。400万人ほどの人口のうち死者は10万人以上にのぼる。しかし人々は15年間、ただ死の恐怖にさいなまれるだけではなかった。街に世界中の食料品があふれる光景に黒木氏は目を見張る。

「停電が頻発して道路は穴だらけです。でも当時レバノンにいた日本人は10人程度だったはずなのに大型スーパーには欧米の食品はもちろん、日本食用の材料が揃っていて乾燥ひじきや刺身醤油まである。想像を絶する豊かさでした」

レバノンは古くから中東文化の中心であり、内戦中も印刷機を山奥に移して本を出版し続けるなど、知的水準でも群を抜く存在だった。内戦で無政府状態であるだけに言論の自由もあった。

「このレバノンに日本の中東研究センターをつくりたい。内戦さえ終われば国は必ず復活する」

黒木氏のこの確信はドイツやフランスが中東各地に持つ研究所を見てきた日本の中東研究者にとっては悲願ですらあった。10年後、文部科学省が外語大に大型予算を認めたことで事態が動き始める。

「レバノンにとってもこれは初のケースでした。ドイツは60年代から研究所を持っていて既得権と政府レベルのサポートがある。フランス研究所は大使館の敷地内にあり、所長は外交官旅券を持つなど政府組織の一部です。外国の一大学がこのような申し出をすることは過去になかったのです」

事務折衝は困難を極めるが、関係省庁の幹部らは歓迎してくれた。

「『レバノンを選んでくれて感謝する』と。日本の研究センター開設で自分たちはまだ世界から応援されていると実感したのでしょう」

センターは05年12月のレバノン政府閣議で設置が承認される。開所式は翌年2月のことだった。

国際政治と研究のはざまで出来ること

黒木氏は中東研究者として、時にどうしようもない違和感を感じる。イスラエルを含めた中東紛争の報道のされ方についてだ。

「9・11事件以来、テロという言葉について文章を書いたり、シンポジウムなどに参加しています。私にとっては一種の場外乱闘のようなものです」

08年出版の『「対テロ戦争」の時代の平和構築』ではそうした違和感を「イスラムに関する無理解」「貧困はテロの原因たりうるか」「第三者的立場の欺瞞」などの論点で概説した。心血を注いだ「中東研究日本センター」は開設の半年後にイスラエルによるレバノン侵攻で3カ月にわたり一時閉室を余儀なくされた。また2年前には内政の対立が市街戦にまで発展した。

それでもレバノンは何事もなかったかのように、たくましく復興を続けてきた。センターも負けじと活動を本格化。常駐の特任研究員派遣に加えて、現地の研究者との国際共同研究プロジェクトも始動した。中東の代表的都市を選び、どのような共存関係が築かれてきたかを解明するのがテーマだ。黒木氏は、世界が直面する問題に貴重な示唆を与え続ける。▼

ベイルート中心部、中東研究日本センター付近の風景。内戦直後は廃墟状態だったが、世界中のブランド品を集めたショッピングセンターが完成。歴史的建造物を残しつつ、地下20mの深さの大駐車場を備える。建設時には古代ローマから旧石器時代にさかのぼる多層の遺跡が発掘された。

くろき ひでみつ
1985年東京大学教養学部卒業、87年同大学院総合文化研究科地域文化研究専攻修士課程修了、同年、東京大学東洋文化研究所助手、89年アジア・アフリカ言語文化研究所助手、96年同助教授、05年から現職。学術修士（東京大学）。

黒木英充 教授

アジア・アフリカ言語文化研究所 中東研究日本センター長

2008年末、イスラエルによるガザ侵攻を見て、「ついにくるべきところまで来た」と感じる。片や何回空振りしてもアウトにならず、もう片方は即刻退場を命じられる。そんな二重基準はいい加減改めるべきだろう。かつてこの地域には寛容さがあった。歴史資料はその事実を雄弁に伝える。悲願だった「中東研究日本センター」を設立させその活動、研究はいま新たな段階を迎えた。

文・小玉進午　写真・高仲建次

現代ロシア文学の実像に迫る

Interview with Kyoko Numano

ロシア文学には難解で深遠なイメージがつきまとう。ドストエフスキーやトルストイなど19世紀の作家の印象が強いためかもしれない。

ロシア文学を専門領域とする沼野恭子氏は、20世紀のロシア文化を比較文学的な方法で調べ、その実像とルーツを説き明かす。2007年7月に出版した『夢のありか―「未来の後」のロシア文学』は沼野氏の2冊目の評論集となる。

第一章は、沼野氏が出会った新旧ロシア作家2人についての論考で、第二章では19世紀後半のポーランド人作家のアメリカ体験と、20世紀前半のロシア人作家による日本受容を比較文学的に論考した。第三・四章は現代ロシアの文化・文学事情の紹介と書評集となっていて、全体として現代ロシアのみならず中東欧諸国・諸民族の小説までを広くカバーするその内容は、読者体験だけではなく、良質の読書案内といえよう。

ぬまの きょうこ
1980年東京外国語大学外国語学部ロシヤ語学科卒業。NHKに入社。92年東京大学大学院総合文化研究科博士課程満期単位取得退学。著書に『夢のありか―「未来の後」のロシア文学』(作品社)、『ロシア文学の食卓』(NHK出版)など。

沼野恭子 教授

大学院総合国際学研究院・言語文化部門

思春期に多くの人が抱く悩み――
『自分はなぜここに存在するのか』
『何のために生きるのか』。
そうした悩みに対して、文学作品が
解決のヒントを与えてくれることも多い。
沼野氏の場合は、それが『アンナ・カレーニナ』だった。
19世紀の昔、遠いロシアの物語にもかかわらず、
そこには自分と同じ悩みを抱えた
登場人物が苦悩しながら生きていた。
この出合いがロシア文学者・沼野恭子を生んだ。

文・小玉進午　写真・高仲建次

「時代の予感みたいなものはありました。大学間の枠を超えて研究者が集まり、それぞれ異なる文芸誌を担当して、それぞれ発禁だった作品や新しい作家が登場すると報告し合い、知識を共有していったのです」

そしてついに89年、長らく発禁本だったソルジェニーツィンの『収容所群島』とナボコフの『ロリータ』がソ連国内で発表された。「これで言論の自由は本格化したと思いました」

2年後、ソ連邦は崩壊する。

続々登場する女性文学の新星たち

ロシアの小説は、プーシキン以来、ドストエフスキー、トルストイ、チェーホフ……と、つい最近まで男性作家の独壇場だった。詩の分野では、ツヴェターエワやアフマートワらの女性詩人を生んでいる一方で、こと散文となると大衆小説や純文学の書き手にあまり大物女性作家は現れなかった。だからこそ、なのかもしれない。80年代後半以降、社会主義リアリズムという呪縛から解放されたロシア文学が、内容的にも形式的にも多様な作品を過去から掘り起こしたり新たに生み出したりするようになった。ついに、華やかな女性作家たちの活躍ぶりが照らされた。

沼野氏が最初に魅せられたのはペトルシェフスカヤだった。

「弱者への目線が際立っています。民族や宗教の問題、売春などそれまでのタブー、女たちの氷のような絶望をとことん凝視し、有無を言わせず読者に味わわせる。『これこそが私達の実態だ』と、ロシア女性から絶大な支持を受けた作家です」

沼野氏の著書『アヴァンギャルドな女たち―ロシアの女性文化』(2003年刊)では、ロシア女性作家らの活躍ぶりを、20世紀初頭に活躍したロシアアヴァンギャルドと比較しながら論じている。

「今は帝政時代からソビエト時代を生き抜いた女性ファッションデザイナーに注目しています。服は着るものですし、注文主の好みを取り入れながらも実用的であり、時代の要請に合わせないといけない。デザイナーとその周りを取り巻く芸術家、画家、アーティストらとのかかわりを研究しようと思っています」

ロシアの文学者の招聘に力を入れている。2009年にはロシアの文芸評論家のスラヴニコワ氏(写真左)を招いた。

今、ロシアは空前の日本ブーム

沼野氏は、翻訳家としても多忙な日々を過ごす。女性文学が多いが、異色なのは歴史推理小説の翻訳である。とりわけボリス・アクーニンに力を注ぐ。実はソ連邦崩壊後のロシアでは国産推理小説が興隆を極めるが、その多くは暴力やセックスの氾濫する低俗な作品だった。

「その点、彼の作品はトルストイなどの〝高級〟ジャンルと〝低級〟ジャンルの中間的な小説を目指すことで、目の肥えた読者にも純粋に娯楽として楽しめるものに仕上がっています」

アクーニンの作品には日本が頻繁に登場する。それもそのはず。モスクワ大学で日本文学を専攻し、三島由紀夫、中上健次らを紹介する著明な日本文学研究者としての顔を持つ。

「今、ロシアは空前の日本ブームです。寿司などの日本食が人気で、村上春樹の本は本屋で平積みになっています。それにアクーニンが紹介する〝日本〟が加わる。彼の作品を読むと自然に日本の知識が身についてしまうといいます。これらが相乗効果を発揮して日本ブームを招いています」

ロシアの書店ではアクーニンの作品は村上春樹と同等のスペースを占め、ロシア目線の日本を知る格好の材料ともなりうる。

ロシア文学の魅力を伝えたい一心で研究者への道を進んだ沼野氏は、日本人のロシアに対する暗く重苦しい負のイメージを変えたいと強く語る。

「文学からは多くの価値観を学べます。若い方には、自分を相対化して異文化に多く触れてもらいたい。それにより悪しき狭隘な国粋主義とか自分絶対主義に陥る危険性がなくなると思っています」

「ロシア文学に生きるか死ぬかの根幹をつかまれた」沼野氏の今後の活躍に目が離せない。V

今までに手掛けた翻訳書は12冊におよぶ。

ロシアの食文化を取材したときに通ったモスクワの食文化博物館。

person doing research

3

認知言語学で日本語の将来を見据える

Interview with Yohey Arakawa

研究道具一式が詰め込まれたかばん。
これを手に、多くの国々を回った。

人はどうやって言葉を覚えるのか。スポーツの得手・不得手、物理の得意・不得意はあっても自分の最初の言葉である母語は、自然と使いこなせるようになる。荒川洋平氏は、基本的な認知能力と言語の関係を考える認知言語学の分野で、世界の言語の研究に勤しむ。

例えば、英語の〝feel up〟は「気分は上々」を意味する。その背景には、人が〝上〟という概念にプラスの価値を見出していることがあるのではないだろうか。反対に、〝下〟はマイナスのイメージで捉えがちである。つまり、「上と下」の価値付けに代表されるように、多くの言語に共通な「表と裏」「前と後」「光と陰」などは、身体の経験・行動知に基づく意味合いが反映される場合が多い。認知言語学はそうした内容を研究領域とする。

「前方は大体どの言語でも未来ですし、後ろは過去です。比喩的に『先が見えない』という表現は諸言語にあります。そういう身体認知の価値付けがもし多くの言語に共通するとすれば、ダイレクトに言語教育に役立てられるはずです」

これまで出版した日本語教育に関する本の数々。
現在は仮想世界のメタファーに関する日本語論を執筆中。

日本語教育に生きる応用認知言語学

執筆者として参加した『英語多義ネットワーク辞典』（2007年刊）では、英語世界の研究成果を集大成としてまとめた。英語の重要多義語1427語を選定し、その多義の仕組みを含めた全貌の解明を目指した辞書だ。なぜ多義語が複数の意義を持つかを明らかにし、そこから見える英語圏の人たちのものの見方を提示している。

一例を挙げると、window の項目では、まず「窓」という意味が示される。その後、「窓」は次々と展開され、「商店の陳列窓」「（コンピュータ画面など）窓の形をしたもの」「駅・銀行の窓口」「世界・心の窓」「時間・機会の窓」と広がっていく。

こうした発想を外国語教育に役立てようとするのが、応用認知言語学だ。

「例えば日本語の〝山〟は単にほかの地面より高く盛り上がった場所だけでなく、仕事の山、借金の山、試験の山、映画の山場といった使われ方もする。なぜ『山』であって、『丘』ではないのか。おそらく人間は山と長く対峙して、その経験から乗り越えないといけないものと感じているのではないでしょうか。そういう推論を立てて意味の広がりを辞書にしています」

著書『とりあえず日本語で―もしも…あなたが外国人と「日本語で話す」としたら』（2010年刊）は、言葉の源流を探りつつ、日本語教師としての経験をまとめて上梓した。世界100カ国以上、300万人を超える〝外国人の日本語〟に対して我々はどうあるべきか、「対外日本語コミュニケーション」の視点から解きほぐす。

発想の違いを受け入れる寛容さ

「日本人は外国人の日本語に、あまり寛容とはいえません。『日本語には敬語や漢字といった独特な表現があり、使い方が難しい』と勝手に決めつけていることが、いびつな対外国人コミュニケーションを形成する一つの要因です。変に外国人を子ども扱いするケースや、相手が日本語で話しているのに無理に英語で答えようとする場合などです。あるいは外国人からの電話で『あなたの言うことが聞こえません。もっと大きい声で言ってください』と言われてムッとしたことはありませんか。でもこれは英語の『I can't hear you well. Please speak out』という極めて普通の表現を日本語にしたにすぎないのです。失礼な意識は毛頭なく、ただ外国人の発想で話しているだけです。外国人の話す日本語に寛容になろう、私たちもある程度わかりやすく話そうというのがこの本の主旨です」

著書では、日本在住の英語圏の人が日本人向けに英会話を微調節している実例も紹介しており、単に技術論にとどまらず日本文化論にもなっている。

21世紀の日本語の進むべき道を考える

現在、日本では「介護日本語」が社会問題になっている。介護分野で働く外国人労働者の増加がその背景にある。「国際化する日本語」を考えた場合、例えば日本国内における「らヌキ言葉」などよりもっと大きな問題に直面している。

「外語大に籍を置く身として、21世紀の日本が外国から好かれるだろうか、日本語や日本文化に興味のある人をシャットダウンしてしまわないだろうかという危惧がある。外国人を『ヨソ者』や『お客』と見るのではなく、おおらかな気持ちで日本社会に受け入れる。そうすることで、この国はもっと暮らしやすく、かつ21世紀に日本人が生きる道も自ずと見えてくると感じています」

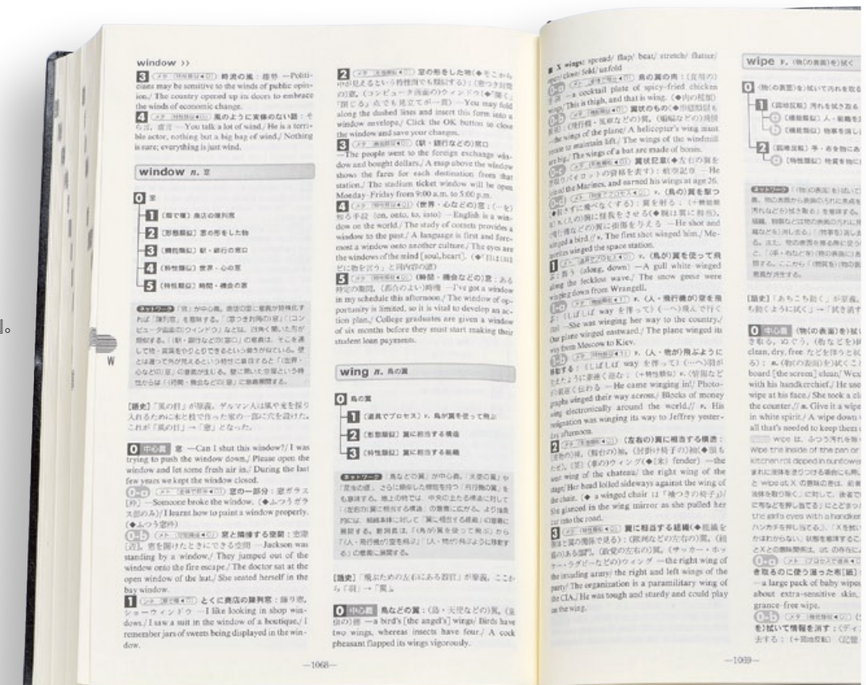
大学を卒業後、通訳者時代にチラシが縁で飛び込んだ日本語教師の世界。気がつけば20年の歳月が流れ、今や延べ1000人、36カ国の学生に日本語を教えてきた。

教室はいつも笑いにあふれ、質問が飛び交う。あるチェコ人の学生は「〝デザートベツバラ〟って言葉、ロシアの田舎の言葉みたいで面白い！」と話し、新鮮な毎日に驚きを隠さない。

ここ4年間、荒川氏は中学高校の先生を対象に、日本語教育を教える教師研修（REXプログラム）に携わっている。自治体の姉妹都市交流などで派遣される日本人教師に日本語教授法を伝授する、〝先生の先生〟役だ。

「外国人相手に現場で教えるだけではなく、自分の経験を学校の先生に教える。自分の考えの整理にもなりますし、先生方もそれを自分の学校に還元できる。奥行きと広がりのある仕事です」

今後も認知言語学と国際的な広がりを持っていく日本語の将来を見据えていくだろう。▼



英語の重要多義語1427語を
解説した『英語多義ネットワーク辞典』。
例えば、「Window」でも、
これだけ多義に広がっていく。

荒川洋平 准教授

留学生日本語教育センター・認知言語学

人は主観の世界に生きている。
仮に、ここに階段があったとしよう。
階段の上にいる人から見れば、
見下ろす先は「下り階段」。でもその逆は
「上り階段」に他ならない。
同じ階段でもどこから見るか
どのように捉えるかによって言葉が異なる。
日本人が考える日本語と、外国人から見た日本語、
というのも同じ関係性で
論じることができるかもしれない。

文・小玉進午　写真・高仲建次

あらかわ ようへい
1984年立教大学文学部仏文科卒業、93年ニューヨーク大学助手、デューク大学助手、国際交流基金日本語国際センター専任講師を経て、99年より現職。
専門はメタファー研究を中心とした認知言語学。

「聴」

kiku

「聴は耳声を待つなり」。江戸時代の儒学者、荻生徂徠の言葉とされる。何気ない日常の中で、偶然あるいは必然に飛び込んでくる音がある。その音は突然で劇的かもしれない。音色に表情があるのなら、人は耳を傾け、そしてその音に隠されている心をつかまえようとするだろう。「聴」。五感で受け止めたその音色は、なぜか時が経っても色褪せることはなく、深く心に刻まれている……。

1. 「聴く」から学んだ西夏文字

アジア・アフリカ言語文化研究所 情報資源戦略ユニット 准教授
荒川 慎太郎
Text : Shintaro Arakawa

できれば一生依頼されたくない、「聴」というお題でコラムの依頼がきた。私は古代文字・死言語を専門としている。11～13世紀の中国北西にあった「西夏」という国の言語と文字であり、現在では言語も文字も使用されていない。だが幸い、西夏文字の発音を漢字やチベット文字で表記した資料などが残っており、ある程度は音声も推測できる。とはいえ、私も含めて現代で西夏語を「聴く」ことがあるとすれば、それは推定音によるものに過ぎない。外国語大学に籍を置く者として、自分の専門とする言語音をネタにできないのは全く切ない。

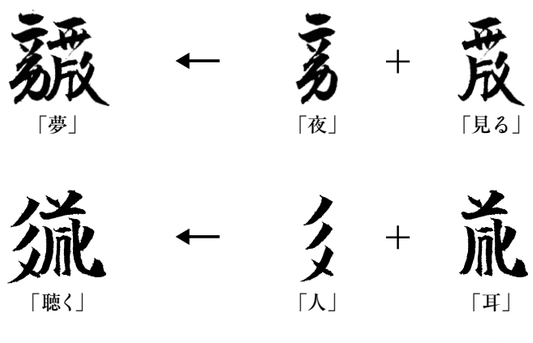
しかしながら「聴」は、私が最初期に覚えた西夏文字である。それにまつわる思い出を記すことにしよう。初めて学んだ文字が、例えば数字や日付を表す字でなかったことには理由がある。もう20年以上昔、西夏を舞台にした『敦煌』という邦画が公開された。井上靖の原作には無い場面で、主人公が西夏文字を教授されるシーンがある。西夏語の先生の解説はこうだ。

「西夏文字は非常に合理的に作られている。…『夜』と『見る』が合わさって『夢』という文字になる。『人』と『耳』を合わせると『聴く』という文字になる」

そこには、私が知っている漢字部首とはかけ離れた、それでいて明らかに表意的な構成要素からなる文字が現れた。当時の私は――今も同様だが――音声言語より文字資料に関心があったようだ。映画の監修をつとめた先生のご著書などでこの文字を確認し、見よう見まねで文字を練習してみた。するといくつかの疑問がわいた。「聴く」という字は「人」と「耳」からできているという。しかし「夢」を構成する「見る」の字は、例えば「人」と「目」に分解できるようにはどうしても思えない。これには何か、漢字の常識では量りがたい規則が潜んでいるのだろうか…

こうした疑問は、私を奇怪な古代文字の世界に踏み入れさせたきっかけの一つだった。主人公が受けた授業は、私にとっても初めての西夏文字の授業であった。

時を経て、構成が簡単に説明できない西夏文字が少なくないこと、西夏語の「聴く」「聞く」は状況に応じて、さまざまな字形(注)・音形を持つことも知った。それらの中には、残念ながら「人＋耳」の字形ほど、明瞭に構成要素に分解できる字は無い。私の学んだ「聴く」はこれからも、初学者が最初に覚える字形の一つとなりそうである。▼



注・漢語の「聴」「聞」に対応するのは、前者は𦔻、𦕅、後者は蕺、𦕅など。
（右は『今昔文字鏡』フォントを使用している）

あらかわ しんたろう
2002年京都大学大学院文学研究科博士課程修了。専門は西夏語・西夏文字。博士（文学）京都大学。著書に『図説 アジア文字入門』（ふくろうの本「世界の文化」シリーズ）、アジア・アフリカ言語文化研究所編（共著）河出書房新社など。共編『西夏語辞典』で第2回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」を受賞（07年）。

イラスト・ミヤギ ユカリ

2. 賑やかさのなかにある釈迦の教え

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 准教授
岡野賢二
Text : Kenji Okano

ミャンマーの学校は賑やかという印象がある。私が住んでいた外国人学生寮は教育大学附属校のすぐ近くにあり、校舎の側を通りかかると、小学校の低学年ぐらいだろうか、いつも教室から元気な声が聞こえてきたものだった。

最初のころは漠然と休み時間なのだろうと考えていた。しかしいつ通っても元気な声が聞こえてくることにあるとき気づいた。毎回毎回うまい具合に休み時間に通りかかる訳でもなかろうし、と思ってよく見てみると、ちゃんと先生がいて授業中である。

学級崩壊が起きているのではない、勉強をしているのだ。聞こえていたのは先生の声に復唱している子どもたちの元気一杯な声だった。

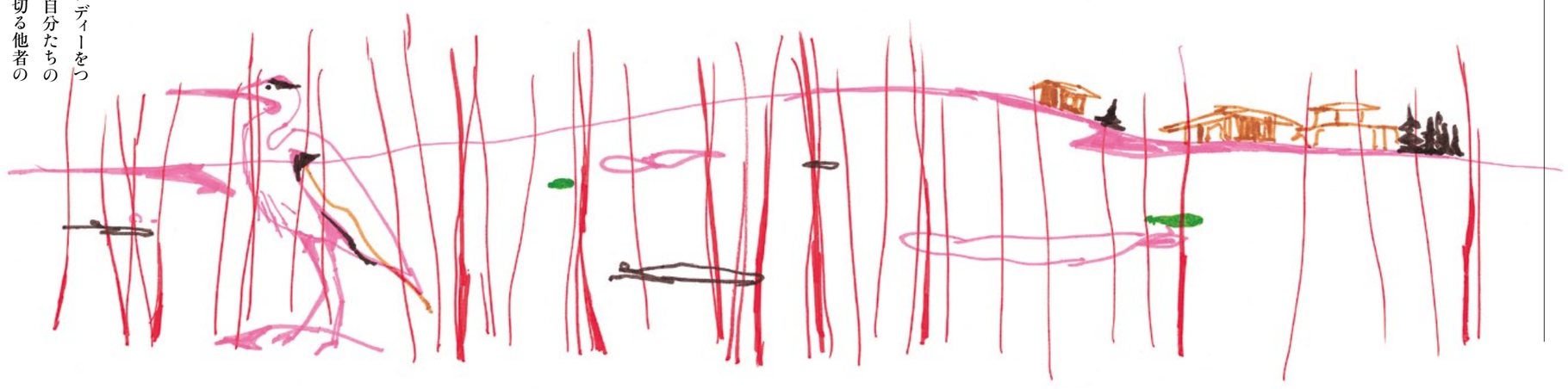
私がビルマ語を勉強し始めたとき「ライッソーバー（ついて言いなさい）」という言い方を習った。ミャンマーでの教室会話の常套句と教えられ、何となく違和感を覚えた記憶がある。「言いなさい」「読みなさい」なら分かるが、自国人に対する教育で「先生の後について言え」とはどういうことなのか。

その違和感が氷解したのはドイツ人講師による言語学講義に出席したときだった。この講義は博士課程の特別授業であり、私以外の受講生は全員が大学教員だった。その講義中、受講生たちが一斉に復唱を始めたのである。講師がそう指示した訳ではなく、さして重要な箇所でもないのに、それは自然発生的に起こった。30人もの大学教員が講師の言葉に続いて叫んでいるのはちょっと不気味だった。

ミャンマーでは基礎教育に限らず、教育とは先達から伝えられることをそのまま憶えることである。その最も基本的な教育法が口写し、すなわち「ライッソー（ついて言う）」なのだ。小学生ばかりか大学の先生もこの基本を忠実に守っていた訳である。

記憶重視の教育は時代遅れ、と誰が言えるだろう。敬虔な仏教徒の国では最も偉大なる智慧者である釈迦の言葉こそが真理である。正しい思考は真理の確かな習得の上になされるものではないか、そう問われている気がする。▼

おかの けんじ
２００７年東京外国語大学大学院博士後期課程単位取得退学、08年東京外国語大学大学院総合国際学研究院（言語文化部門）准教授。専門はビルマ語。著書に「現代ビルマ（ミャンマー）語文法」（２００７）国際語学社がある。



3. 内と外を聴くコルシカの歌

大学院総合国際学研究院 言語文化部門 准教授
博多 かおる
Text : Kaoru Hakata

地中海に

浮かぶ島コルシカには、男性たちが歌い継いできた力強いポリフォニーがある。パディエッラと呼ばれる歌謡は、楽器の伴奏もなく、即興で歌われる定型歌だ。明るくも厳しいコルシカの光と空気が背後に立ち上がるかのような、芯のあるエコーが弾け出てくる。かつては教会でも広場でも歌われ、村人たちが道で行き会えば、その場で会話するように歌い出すこともあったそうだ。だが今は消滅の危機にさらされ、「パディエッラ風の歌謡」は近年、ユネスコの無形文化財に指定された。

コルシカにはもともと朗唱の習慣があったし、日常生活でも、歌で言葉をかけあう人々がいた。そんな風土で生まれた歌では、言葉のかたちから歌のリズムや旋律が生まれ、音楽は、言葉の中に隠れている抑揚を解き放っていく。歌い手たちは、昔から伝わった歌詞や旋律を記憶して、そこに自分らしさを彫り込むという。言葉と音楽がたがいに耳を澄ましし、歌い手は、今ここに響く自分たちの声と、集団の記憶と声を、同時に聴いている。

「パディエッラ風の歌謡」は三つの声部で歌われるが、主声、低声、高声の歌い手は、お互いに耳と目と口で相手を読み、追いかけ、臨機応変に距離を変化させていく。時には片耳に手をあてて声を響かせ合う。片耳を寝かせて、自分の身体を流れるたくさんの倍音を聴きながら、もう一つの耳で、音を遊ばせて作る独特な声の重なりのこだまに聞き入っているのだろう。自分と他者、言葉と旋律、伝統と個人が、互いに強く語り、聴き合い、表面張力しながら虚空のはるか高いところで支え合っている。

コルシカ語のみでなく、ギリシャ語、ラテン語、サルディニア語など、過去に島にやってきたさまざまな言葉が、歌に残っている。そして現在は、近代以降しだいにコルシカを覆ってきたフランスの言葉を交えてメロディーをつむぐグループも出てきた。彼らは自分たちの内部を聴きながら、自分たちを横切る他者の言葉を聴き、響かせる。

もっと強い声で／もっと大きな声で言ってくれ／ますます音を通さない／俺たちの扉を開けてくれ

と、語り手を失っていくコルシカ語とその文化の行方を模索して「イ・ムヴリニ」は歌う。音を通さない扉は、何でできているのだろうか。扉の向こうで声を失った風景の波長は、歌にこだまさせることで探しあてられるのか。外と内に耳を開いた言葉たち、互いに耳を傾け合う複数の旋律から次々と新しいエコーを生み出すコルシカのポリフォニー。その響きを聴いていると、たくさんの扉に阻まれて、世界の多くの音が聴こえないことをはっきりと思い出す。そして、聴こえない歌を強く聴きたいという渇望がよみがえってくる。▼

はかた かおる
１９９９年東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程（フランス語フランス文学専門分野）修了、２００３年パリ第七大学テクストとイメージの科学科博士課程修了。専門はバルザック、フランス近代文学。訳書に『ガンバラ：バルザック 芸術／狂気小説選集2』（筆者担当『ガンバラ』、水声社）、『地球のかたちを哲学する』（ギョーム・デュプラ著、西村書店）、『作家の家』（F・ブレモリ＝ドルーレ著、鹿島茂監訳、西村書店）がある。

Influential Face

歴史を刻む在学生

Text by
Shingo Kodama
Photo by
Kenji Takanaka

「語劇の新たな船出を支える」

堀 圭太

ドイツ語専攻2年

上：各団体に教えるため、照明、音響装置の操作は早々に覚えた。
中：舞台の演出に欠かせない照明装置。
下：9月からは講習会、打ち合わせなどで休日返上の忙しさ。
この日はウルドゥー語の練習に立ち会う。

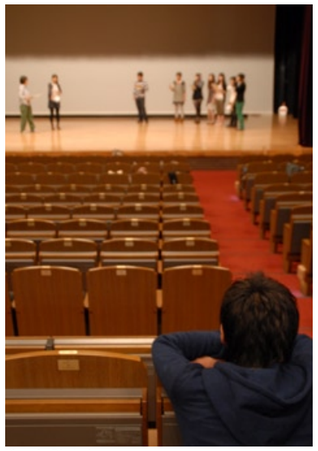


Photo by Rie Asakura

毎年11月に開催される外語祭は、外語大の一つの象徴といえる。その外語祭にとって、「語劇」は起源そのものであり、学習の成果を試す発表の場でもある。

ドイツ語専攻の堀圭太さん（2年）は、語劇局長として88回目となる2010年の語劇を取り仕切る。

「今年から会場が変わります。そのため何から何まで初めてのこと。蓄積されたノウハウは、そのまま通用しないでしょう。何が起こるかわからないだけに、責任の重さを感じています」

会場は、2010年春に完成した異文化交流施設「アゴラ・グローバル」内にできた「プロメテウス・ホール」に変わった。09年までの会場は、定員280人と手狭で、例年観客が入りきらないことも多かった。

その点、プロメテウス・ホールは501人を収容でき、最新の音響・映像設備はもとより同時通訳設備も完備している。ここで26の専攻語の2年生と3つの有志団体が5日間にわたり語劇を上演する。

堀さんは、高校では演劇部に所属していた。だが、当時の学園祭実行委員に杓子定規な規則を押し付けられたせいで、楽しんで舞台に臨めなかった苦い経験があった。

「でも批判しているだけではだめだ、それなら自分がやろう」と思い、入学後すぐ外語祭の運営にかかわった。

堀さんの仕事は、大学との交渉や団体間の調整、上演環境の整備など多岐にわたる。語劇に出演する各団体との打ち合わせは、5月から始まり、照明や音響といった設備を説明する。本番前の9～10月は土日返上の忙しさだ。

「例年ならマニュアル通りに『ここはこうなります』という話で済んでいたのが、今年はすべてが初めてのこと。『ここはこうします！』と自分の意思をはっきり示し、実行していく必要があります。悔いのないように全力を尽くしたいと思います」

数々の歴史を重ねてきた語劇に今また新たなページが刻まれようとしている。V

Keita Hori
高校3年生のとき、
外語祭を見て「日本じゃない」雰囲気に感動、
進学を決意した。
60人ほどからなる外語祭実行委員会中、
語劇局は15人で構成される。東京都出身。

外語祭の歴史は
「語劇」の歴史そのもの。
新たなステージの幕が
今、上がる。

News

●新任紹介

外語大のメンバーとなった方々から一言いただきました

大学院総合国際学研究院・言語文化部門 講師
専門 スペイン中世美術史
久米順子
Junko Kume

キャンパスで日本語でもラテン・アルファベットでもない言葉の新聞や本をごく普通に読んでいる人を見かけたり、外国語が耳に飛び込んでくるとき、外語大に来たことを実感します。

着任は2009年10月でした。私自身は、この緑が多いキャンパスとは対照的な、ごちゃごちゃした街中のマンモス大学出身です。あまりそこにそぐわない、まったりした古楽サークルで下手な笛を吹いていたとき、CDジャケットに使われていた中世イベリア半島の写本挿絵に一目惚れしたのが運の尽き。その後は挿絵の不思議さと面白さに導かれるまま、日本やスペインをはじめ、短期滞在や研究発表などを含めるとフランス、アメリカ、メキシコなどで遍歴修業を重ねてきました。スペイン中世美術と聞くと随分限定的なテーマに聞こえますが、それでも世界はこれだけ広がるのですね。今後は若いみなさんの世界を広げるお手伝いをしたいと思っています。

大学院総合国際学研究院・言語文化部門 講師
専門 20世紀フランス文学
桑田光平
Kohei Kuwada

2009年10月に着任しました。専門は20世紀フランス文学ですが、ダンス、美術、建築などに関心があり、それらの分野に関する文章を書いたり、翻訳をしたりしています。東京大学の英米文学科を卒業した後、サルトルやカミュなどの作品が好きだったため、大学院では仏文科に進みました。留学し、パリ第4大学でロラン・バルトについての博士論文を準備しつつ、フランスの大学の二重登録制を利用して、パリ第8大学では美術の勉強をしました。

こうした寄り道のせいで、博士論文の提出が遅くなってしまいましたが、寄り道する癖は今も直っていないようです。そのためか、趣味も年々増えつつあります。外大生は真面目で快活な人が多く、楽しい日々を過ごさせてもらっています。

大学院総合国際学研究院・言語文化部門 講師
専門 ドイツ文学、文化・思想史、比較文学
西岡あかね
Akane Nishioka

2010年4月に着任しました。ドイツ留学期間が長かったため、外語大がまだ西ヶ原にキャンパスを構えていると思い込んでいましたが、一方で寄り道はしないという学生も少なくなく、やや寂しい気もします。在学中は知識の獲得や就職だけを考えるのではなく、自分で読み、考え、生産する力を身につけてほしいですね。

大学院総合国際学研究院・言語文化部門 講師
専門 言語学
野元裕樹
Hiroki Nomoto

2010年度に着任しました。私は東京大学を卒業し、博士前期課程が外語大でしたので、母校に戻って来たということで、大変嬉しく思っています。

専門は言語学です。マレーシア語が研究の中心で、マレーシア語専攻の授業を担当しています。外語大に着任する前は、シンガポール国立大学で1年、米国のミネソタ大学で2年半、博士課程に在籍していました。博士前期課程中にはマレーシア国民大学に1年ほど留学しましたので、私の留学経験は計4年半になります。北米の博士課程は通常5年ですので、4年半というのは期間的にはごく普通なのですが、3つの大学という点では、非常に稀ではないかと思います。

保健管理センター教授
松本晃裕
Akihiro Matsumoto

私は長い間、大学病院で心筋梗塞などの重篤な患者さんを診てきました。瀕死の患者さんを救うことも重要ですが、病気の予防はより重要であると考えるようになり、2010年4月より保健管理センター教授として学生さんを中心とした診療に従事させていただいています。

現代の日本ではストレスが多いですが、心身の健康状態が保てていない学生諸君が少数ながら見られます。個々人に対する学生支援のみならず、大学さらには社会全体でどのように対処していくべきかについて、保健管理センターでは、現在の新しくてきれいなキャンパスには驚きました。

外大生の第一印象は、真面目でおとなしい。真面目に知識を得ようとする姿勢にはとても好感を持てますが、欲を言えば、もう少しアグレッシブな「食いつき」を期待したいです。

研究ではドイツの表現主義文学を主なテーマとしています。本が好きで文学部に入ったのですが、授業を通じて、趣味としての読書と研究は違うということに気がつきました。研究を面白いと思えるようになったのは、長い学生時代に出会ったさまざまな先生方のおかげだと思います。私自身、これから教師として、外語大の学生に何か自分のテーマや関心領域を見つけるきっかけを提供できればいいなと考えています。

実は、私は食いしん坊で、各国料理を作ることが趣味なので、外語祭は密かな楽しみです。

授業では、マレーシア語やマレーシア、シンガポールのことはもちろんですが、アメリカの事情についても自身の経験に基づいて話し、教師、学生共にアジアと欧米のどちらかに視点が偏ることがないようにしています。

News

は広い視野に立って活動していきたいと思っております。

心身の健全さがこれからの日本を担っていく若者にとって、最も必要不可欠の要素です。これら両面における健康の保持・増進を図るために、プライマリケアおよびヘルスプロモーションの推進を行ってまいります。さらに教職員に対しても生活習慣病予防と、疾病の早期発見などに重点を置きつつ、積極的に産業医活動などを行う所存でありますので、御支援を頂きますよう宜しくお願いいたします。

監事 寺前 隆
Takashi Teramae

4月から監事に就任しました。監事というのはどういう仕事なの？　と疑問を抱かれる方が多いかと思いますが、企業でいえば監査役、外語大の業務全般を監査するのが仕事です。監事に就任して以降、府中キャンパスの中を歩き、

また、多くの先生方や、学生の皆さんと直接お話をする機会を得て外語大についてより多くを知ることができたように思います。

外語大の魅力は何と言ってもさまざまな言語を通じて世界の隅々につながっていることだと思います。外語大には門も塀もありません。非常に開かれた大学です。その主役で主人公である学生の皆さんが自由に学び、楽しく研究できるようにその環境をもっともっと良いものにするためのお手伝いが少しでもできればと願っております。

監事 松田千恵子
Chieko Matsuda

監事、というと何やら堅苦しいものに聞こえがちです。ひたすら帳簿を検閲したり、数字の突合にいそしんだり……。もちろん、そうした職務もあるのですが（笑）、重要なのは、外語大がその目指す将来に向かって、公明正大に進んでいくのを見守り、時には意見を述べていくことです。

現在、日本はグローバル化の波に直面しており、外語大の果たすべき役割は非常に大きなものがあります。世界各地にはさまざまな社会、文化、言語があり、その多彩さに取り組む大学の姿は、今、最

も必要とされている多様性とその受容をまさに体現するものだからです。これまで金融業界で長く働き、今は経営コンサルタントとして日々企業活動に接していますが、こうした外語大へのフォローの風を最近しばしば感じます。外部の視点からビジネスの大きな波を大学に届け、大学の確かな将来を形作る一助になることができればと思っています。

プロメテウスの神話

プロメテウスはギリシャ神話に登場する神である。その名は、「pro（先に、前に）＋metheus（考える者）」で、「先見の明を持つ者」「熟慮する者」の意味を持つ。神々の姿に似せて創られた人類に、「火」を伝えたとされる。人類は、その火によって文明を発達させた。アポロドーロスの『ギリシャ神話』第1巻によると、人間を創造したのもプロメテウスだったといわれ、水と泥から人間を創り、他の動物の持つ全能力を与えたとされている。また、火だけでなく、数、建築、気象、文字などの知恵を伝えたことから、プロメテウスは古代ギリシャの知の象徴だった。一方で、人類に火と知性をもたらしたプロメテウスは、主神ゼウスの怒りに触れ、コーカサスの山に閉ざされることになった。そこで毎日、禿鷹に肝臓をついばまれる業苦を強いられた。だが、プロメテウスは不死の存在であるため、肝臓を何度も再生しのちにヘラクレスにより解放されるまで半永久的な拷問が行われていたと伝えられている。